

貧困をみる眼と自由の選択*

貧困脱却から貧困覚醒への発想転換のすすめ

Perception of Poverty and Choice of Freedom

大場 裕之

Hiroyuki Oba

Abstract *This paper examines the biased perception of poverty by using the Value-Conscious Matrix (VCM), and has shown the total picture of perceived poverty. This matrix has brought out a clue that the essence of poverty is the “scarcity” of human perception, which includes not only economic or materialistic poverty, but also spiritual poverty. Within this common platform of scarcity, the existing literatures of poverty studies in different disciplines have been captured in a bird’s eye view. The question of “Who is poor?” is analyzed in the Needs-capability matrix and is classified into four groups. Finally, the strategy of being free from poverty or perceived scarcity is proposed and makes possible to attain the real well-being by taking “given freedom” in the freedom matrix. What it implies here is not the poverty removal, but poverty awakening, and not “freedom to choose”, but “choose to freedom”, which matters to all human being of freedom-driven global society.*

キーワード：貧困、価値意識、欠乏、ケーパビリティ（潜在能力）、よい生き方（well-being）、自由の選択、真理

貧困問題は人類に課せられた緊急かつ最重要課題の一つであり、膨大なる貧困研究が全世界的に積み重ねられている。そして、国際機関から草の根的な市民団体に至るまで、さまざまな形で貧困打倒のために行動、奮闘努力されている姿には感銘すると共に深く敬意を払いたい。しかし、貧困研究の学際的広がりや政策的な貧困削減努力にもかかわらず、今日、貧困問題は解消するどころかより一層深刻さを増しているようにも思える。今大切なことは、多分野にわたる多彩かつ精力的な貧困研究や貧困削減活動をバラバラに考えるのではなく、有機的に繋ぐ共通の思考フレームの土台をつくり、貧困そのものの本質を知り、貧困と真の豊かさ（true well-being）とを繋ぐ道筋を共有化することではなかろうか。

小論では、そうした問題意識のもとに、価値実現論¹⁾の立場から、貧困現象の多

* 本論文は、平成19年度廣池学事振興基金プロジェクト（経済発展とライフスタイルに関する国際比較研究）および平成18年度経済社会総合研究センタープロジェクト（価値意識に関する理論および実証研究の現状と課題）の研究成果の一部である。

様な捉え方（見る眼）を共有化できる共通のモノサシ（基準）としての“欠乏”を提示し、貧困研究・活動のネットワーク化のための対話可能な分析フレームと貧困問題解決のヒントを提供することが狙いである。

そこで、まず初めに、貧困現象を捉える我々の眼にバイアスがあることを問題視し（第1節）、所得水準と幸福との関係に関する国際比較データをもとに、貧困問題を経済面に限定する危険性について批判的に論ずる（第2節）。次に、多様化するこれまでの貧困研究の大きな流れについて、貧困問題のキー概念と考えられる“欠乏”という視点から体系的に整理・検討する（第3節）。その上で、新たな専門分野である価値実現論の立場から、多様かつ複雑な貧困もしくは“貧しさ”現象を全体的に把握するための共通の分析フレームを提示する（第4節）。そして、最後に、貧困と自由（＝潜在能力）との関連性、および、貧困と真の豊かさの結節点としての自由の選択について明らかにする（第5節）。

我々の主張点とは、基本的に「貧困は悪」とする固定観念の打破と貧困と自由との関連性を明らかにすることにあり、具体的には、以下の3点に集約される。第1は、いわゆる貧困問題とは腹を満たすパンの欠乏だけの問題ではないこと、第2は、貧困政策とは、単に物質面（“見える”パンの欠乏）だけでなく、精神面をも含む“真の豊かさ”の実現にあるべきであること、第3に、貧困脱却ではなく貧困の覚醒が戦略論的に必要であり、真の豊かさには到達する道とは、“選択の自由”ではなく、“自由の選択”にあることである。

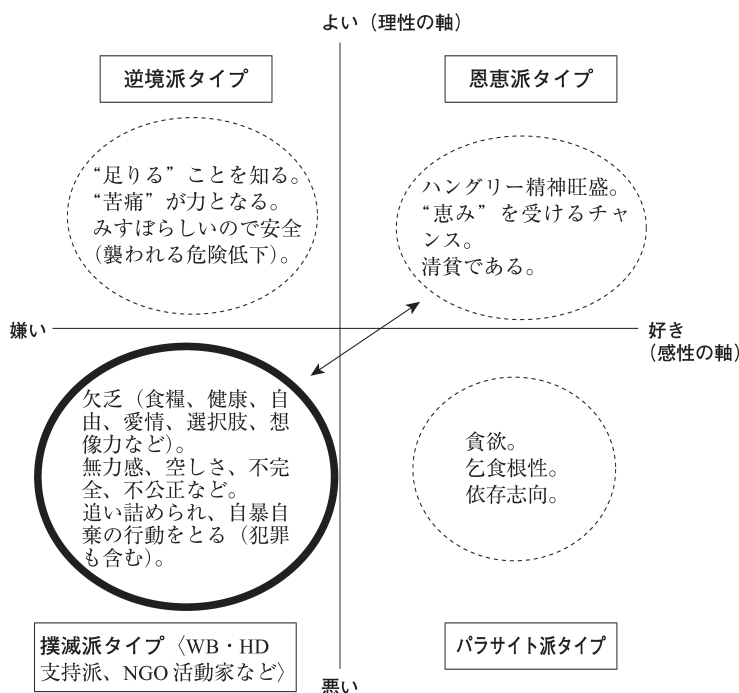
1. “貧困を見る眼”に潜む危険性

貧困と聞くと、一般的には、忌み嫌うイメージで捉えられており、そこから脱出することが善であると考えられている。すべての人間は貧困から脱出し豊かになりたいと切望するし、人間の尊厳のためにもその必要性がある。これはごく「当たり前」のことであり、誰も否定しない事実である。しかし、そうした切なる願望があるにもかかわらず、貧困から脱出できていないという事実があるとすれば、その事実こそ目を向けるべきである。そのための第1歩として、貧困に対する価値前提を問うことから開始したい。つまり、貧困、あるいは“貧しさ”という現象を我々はどう捉えているのか、その眼を点検しどこに問題があるのか、一緒に考えてみたい。

“貧困”あるいは“貧しさ”現象を見る眼がなぜ問題なのか、財団法人統計研究会内に設置された貧困に関する学際的研究グループによる数人の専門家との議論をふまえて、その問題の所在を明らかにする。貧困に対しどのようなイメージを描いているのか、新しい専門分野としての価値実現論の手法（価値意識マトリックス）を用いてブレイン・ストーミングを行った。その方法は情報を共有化するためのシンプルな手法であり、価値意識を2つのモノサシ（判断基準）で色分けし、意識

1) (真の学力である) 学問力を身につける専門分野としての価値実現論については、大場+大場ゼミナール共著 [2007] 『学問力のすすめ』(麗澤大学出版会)を参照されたい。

図表1 貧困もしくは“貧しさ”に対するイメージ（価値意識）



出所：“貧困の学際的研究”の研究会専門家メンバーの意見などをもとに筆者作成。

注：専門家メンバー全員、撲滅派タイプを支持。WB：世界銀行、HD：人間開発。

を“見える”形にする手法である。ひとつのモノサシとは、“よい”、“悪い”といった理性的な判断や意識を示す基準であり、もうひとつは、“好き”、“嫌い”といった感性もしくは感情的な意識を示す基準である。このモノサシによって、貧困もしくは“貧しさ”に対する意識の分布を確認してみた。その結果は、当初想定していたように、貧困は“悪くて嫌い”というイメージを持っている人が圧倒的であった。しかし、図表1をみれば、その事実こそが貧困を色眼鏡（バイアス）の眼で見ていることの現われであることに気づく。この図表は価値意識マトリックス（Value-Conscious Matrix, VCM）と呼んでいるもので、その中の左下に位置する**撲滅派タイプ**に意見が集中している様子がわかる。貧困問題の専門家のイメージであるがゆえにこれは当然といえる。しかし、マトリックス全体に視野を広げると、貧困に対するイメージなり捉え方は、少なくともあと3つの領域があることに気づく（もっとも、ブレーン・ストーミングの段階では、何も意識されていない真っ白な状態であった）。その3つの領域とは、貧しいことは“嫌だがよいこと”と意識している**逆境派タイプ**、その反対に、“悪いことだが好きである”という**パラサイト派タイプ**、そして、“好き？でよい”と考えている**恩恵派タイプ**である。各々のタイプのネーミングは、図の円内に示されているような各々の判断理由からヒントを得た。この中では、とくに**撲滅派タイプ**と**恩恵派タイプ**は貧困に対して正反対

のイメージを描いている。

前者は、貧困が内包する欠乏・無力感・空しさ・不完全・不公正・自暴自棄などのマイナス面を重視する一方、後者では、ハングリー精神や清貧さ、恩恵などといったプラス面を重視する。こうしてみると、貧困や貧しさを、全面的に悪しき現象として“思い込む”ことは危険であり、プラス面をも考慮する必要がある。問題は、図の中の矢印で示されているように、各々のタイプそのものではなく、両者の間でイメージギャップが存在することに気づかない点である。なぜ、このような違いが発生するのであろうか？ その原因を探るために、各々のタイプで検出された理由をつき合わせてみると、“欠乏”というキーワードが貧困意識に共通する現象として浮かんでくる。撲滅派タイプと恩恵派タイプの違いとは、その“欠乏”状態に対する捉え方の相違に由来すると考えられる。撲滅派タイプは物質的、経済的(所得)“欠乏”を前提としているのに対し、恩恵派タイプは精神的、非経済的“欠乏”を想定している。つまり、両者の前提が異なることに気づく。前提が異なれば、両者の知的交流は分断され、同床異夢の状態であり、対話不能となるのは当然の帰結である。それでは、両者が各々イメージに従って、貧困現象を別々に考えるべきか、それとも両者に共通する現象として、共通の分析フレームのもとで検討すべきか、判断する必要がある。我々は後者の立場に立って考えたい。なぜなら、貧困現象の中核である物質的欠乏と精神的欠乏は人間を扱う以上、相互に影響しあう関係にあり、それを別個に分断して分析すれば、貧困という問題の本質を捉えられないと考えられるからである。もうひとつの理由は、後述するように、貧困研究の拡大と深化に伴い多様なアプローチが相互の関連性もなく乱立する状況(ビッグ・バン?)となっており、貧困現象を全体的に把握する“対話可能な”共通の分析フレームなり共通の方法論を確立する必要性が高まっていると考えるためである。

2. 所得貧困が解決されれば、人間は幸せになるのか？

貧困現象のキーワードである“欠乏”という切り口がなぜ必要なのか、その根拠を示すために、その物質面と精神面の相互作用の所在について、もう少し統計的事実に基づいて考察してみたい。撲滅派タイプが前提とする物質的、経済的“欠乏”とは、“目に見えるパン”の不足をさし、より具体的には所得水準が絶対的、相対的に低い、絶対的貧困や相対的貧困を問題としている。それに対し、恩恵派タイプの精神的、非経済的“欠乏”とは、“目に見えないパン”の不足状態をさし、やる気不足、生活の質(Quality of Life, QOL)²⁾の低さや“心の貧しさ”、社会的排除などの問題を取り扱っている。撲滅派が前提とする物質的欠乏が経済発展による所得

2) 生活の質(Quality of Life, QOL)に関する測定と評価の問題については、マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン、竹友安彦監修・水谷めぐみ訳 [2006] を参照されたい。ヌスバウムとセンは、QOLを評価するためには、お金(一人当たりGNP)の尺度だけでは、粗雑であり不完全であるとし、どのような生活をするのできるのか、という問いに答える指標(平均寿命、ヘルスケア・医療サービス、教育、労働、政治的、法的権利、人間関係における自由度、愛や感謝のような感情実感など)が必要であることを主張している。同 [2006]、11~13 ページ。

水準の向上によって解消されれば、(多くの経済学者が想定するように) 貧困問題は解決されたと考えてよいのだろうか? 別言すれば、“目に見えるパン”を食べることができるになれば、人間は欠乏から、あるいは貧困から解放されるのだろうか? 我々は、この問いに対して“ノー!”と言いたい。なぜならば、人間とは、“目に見えるパン”だけではなく、“目に見えないパン”によって生きている存在であると考えられるからである。したがって、物質的欠乏を前提とするアプローチとは、人間を物質的な存在に貶めている“落とし穴”にはまっているのではなからうか。真の発展とは、人間の物質的欠乏だけではなく、精神的な欠乏からの解放である。そして、その目的とは、人間開発報告書でも指摘しているように、「人間の福祉 (human well-being)」を達成³⁾することであり、物質的豊かさ⁴⁾だけではなく、精神的豊かさも含む“真の豊かさ”を享受することが大切なのではなからうか。

現実的に、人類は所得水準の向上に伴い、精神的な欠乏からも解放されているのであろうか? “欠乏”の反対概念は、“満たされている”(満足ではない)ことであり、人は満たされている限り、幸福感を味わう。それでは、経済発展による物質的欠乏からの脱出は人類に幸福をもたらしているといえるだろうか? この問題を実証的に示すことは至難の業ではあるが、不可能なことではなく、事実この方面での研究も進んでいる。その代表的研究として、例えば、シカゴ大学の社会学者である R. イングルハートらが中心となり実施している世界価値観調査がある。この調査には幸福感に関する主観的データも含まれているので、所得水準と幸福感との関係を観察することは可能である。図表 2 をご覧いただきたい。価値観調査の対象国である 71 カ国各々における 2000 年代初めの一人当たり GDP (所得水準の指標) と「非常に幸せに感じている」人の比率 (幸福度の指標) が示されている。確かに、所得水準が上昇するにつれて、幸福度も上昇する傾向にあることが読み取れないこともない。しかしながら、分散もかなり広範囲にわたっており、両者の相関もかなり低い (相関係数は 0.256)。ここで注目すべきことは、所得水準の向上が必ずしも幸福感の高揚に結びついていないという印象を受ける点である。所得水準がほぼ同じ段階にある国同士で比較してみると、例えば、オランダやデンマークなどの幸福度が高い国がある一方、イタリア、ドイツなどの国の幸福度は低く、大きな格差が生じている。また、所得水準は低くても幸福度の高い国、例えば、ナイジェリア、タンザニア、ベネズエラ、メキシコなどの国があげられる。同調査では、各国 1000 サンプルをガイドラインとしているが、その中に、サンプリングバイアスがありその影響が反映されているとも考えられるので、幸福度データを解釈する際は注意する必要がある。とはいえ、経済発展段階が類似する国家間においても幸福感において格差が存在するという否定できない事実がある。このことから、我々

3) 国連開発計画 (UNDP) [2004]、166 ページ。

4) 物質的豊かさに関する体系的、歴史的な分析としては、ウィリアム・バーンスタイン、徳川家広訳 [2006] を参照されたい。バーンスタインは、19 世紀初頭から現在に至るおよそ 200 年間の特徴とは、持続的な富の増大 (近代経済成長) であるとし、その鍵が①私有財産制、②科学的合理主義、③資本市場、④迅速で効率的な通信・輸送手段、という 4 要素にあると分析している。同 [2006]、25~33 ページ。

は、所得貧困の解決が即、非物質的欠乏の解消を意味せず、心豊かで幸福感に満たされた人口を増やすことには結びついていないことを確認することができる。

3. 貧困研究の多様化を“欠乏”の視点から全体的に捉える

それでは、これまでの貧困研究では、貧困の根源にある“欠乏”問題についてどのように捉えてきたのであろうか？

貧困研究の大きな流れとして、“貧困現象とは腹を満たすパンの欠乏だけの問題ではない”という認識はすでに強まっており、世界銀行や国連開発計画（UNDP）などの国際機関だけではなく、貧困研究者の間でも貧困というものを多面的に捉えようとする試みも本格的に開始されている。事実、多分野にわたって学際的に貧困問題にアプローチしているのは、その証左と言ってよい⁵⁾。我々は、ここでそのような膨大な貧困研究をつぶさにレビューすることが目的なのではなく、“欠乏”という視点から、あるいは“欠乏”という飛行機に乗って、多様化しつつある貧困研究の流れを鳥瞰することを試みたい。そうすることで、貧困問題をトータルに分析するための共通のモノサシを発見する糸口が見つかるかもしれない。

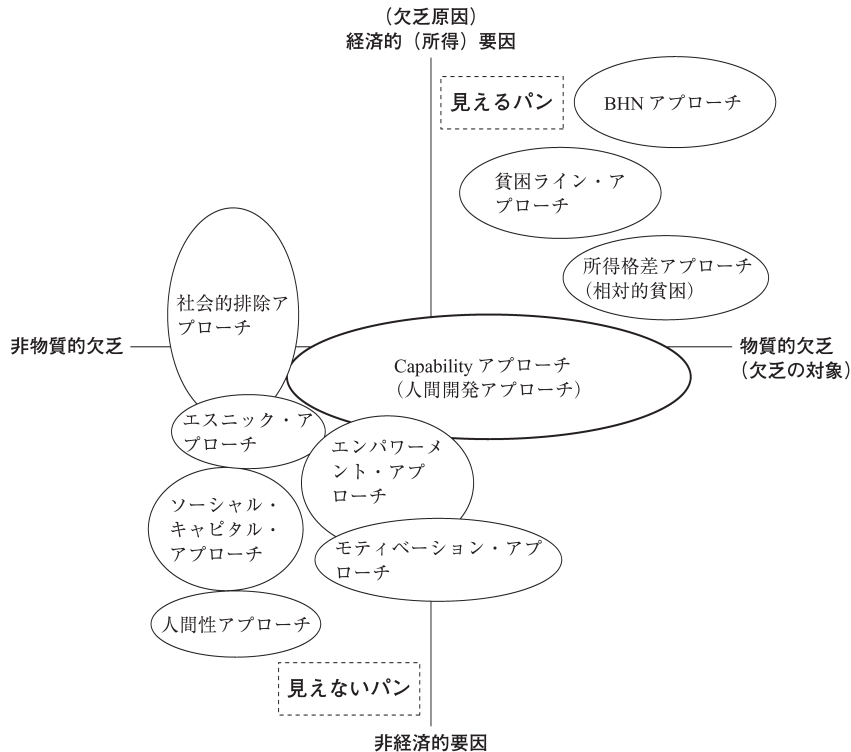
貧困研究を鳥瞰するためには、その糸口としての“欠乏”という視点をもう少し噛み砕く必要がある。これまで考えてきたように、貧困現象に共通するのは、何らかの欠乏状態をさしている。そうだとすれば、人間の何が欠乏しているのであろうか、そして、それは何故問題なのか、さらに、欠乏の原因とは一体何か、このような問いに直面せざるを得ない。“欠乏”していることが問題なのは、“欠乏”している主体がその状態に苦しみ、困っていると感じているからに他ならない。

そこで、人間が欠乏して困る領域を物質的欠乏と非物質的欠乏の2つのタイプに分けてみたい。前者は、“見えるパン”の欠乏をさし、具体的には、食糧不足、栄養不足、身体的欠乏などが含まれる。それに対し、後者は、“見えないパン”の欠乏、つまり精神的欠乏をさし、具体的には不安、孤独、社会とのつながりの欠如、やる気不足、自立心の欠如、能力不足などが含まれる。この2種類の欠乏問題を重視するのは、この状態を放置しておく、病や死に直面するからである。次に、なぜ欠乏しているのか、その原因についても、経済的（所得）要因と非経済的要因に分けることができる。後者には社会的、政治的要因のみならず、文化的、民族的要因なども含まれる。

このような欠乏のタイプと原因という2つの基準から4つの領域が創出されるので、これを“欠乏マトリックス”と呼ぶとすれば、そのマトリックス上で貧困研究の大きな流れを鳥瞰することが可能となる。ここでは、図表3に示されるように、右上の“見えるパン”の欠乏領域から左下の“見えないパン”の欠乏領域へと貧困研究が拡大し⁶⁾、その対象地域も発展途上諸国だけではなく、先進諸国⁷⁾も含

5) 日本における貧困に関する学際的研究の試みとしては、当研究グループによる研究やアジア経済研究所の「貧困削減・社会開発研究グループ」（2003年10月発足）などによる研究活動が目される。なお、「貧困削減・社会開発研究グループ」の研究成果としては、二村泰弘編 [2005] を参照されたい。

図表3 “欠乏マトリックス”から捉えた貧困研究の広がり (“ビッグ・バン”現象)



出所：貧困研究に関する各種文献をもとに筆者作成。

注：BHNはBasic Human Needsの略。

んでおり、さながら“ビッグ・バン”現象とも言える状況を呈している。“見えるパン”の欠乏領域では、主に経済的(所得、消費)要因から取り組んできた「BHN、Basic Human Needsアプローチ」、「貧困ライン・アプローチ」、「所得格差アプローチ」などのオーソドックスなアプローチがあげられる。一方、“見えないパン”の欠乏領域では、非経済的要因をも包摂したアプローチであり、選択の自由(機会利用能力)を重視する「Capability(人間開発的)アプローチ」や社会的(教育や政治も含む)参加機会の不平等を注視する「社会的排除アプローチ」⁶⁾などがある。また、信頼や社会的ネットワークを重視する「ソーシャル・キャピタル・アプローチ」や「エスニック・アプローチ」⁷⁾、そして参加能力や動機付けを重視

6) 欠乏(貧困)現象の全体像を捉える試みとしては、Lister, R. [2004]を参照されたい。Lister 女史は、自らの16年間にわたる貧困児童支援活動(Child Poverty Action Group)の経験をふまえて貧困実態を体系的に分析している点で注目するに値する。

7) アメリカにおける貧困実態と貧困政策に関する包括的な研究については、Danziger, S. H.・Haveman, R. H. eds. [2001]を参照のこと。

8) 「社会的排除アプローチ」としては、アジット・S. バラ、フレデリック・ラベール、福原宏幸・中村健吾訳 [2005]を参照されたい。バラ、ラベールは、社会的排除をグローバル化との関連性において問題提起している。グローバル化は、利潤、経済成長、そしてよりよい生活条件をもたらす機会の源泉であるが、他方では、分断、安定性の欠如、そして増大する不平等の源泉でもあるとし、脆弱さと多くの人々の排除が、グローバル化によって進行していると指摘している(同 [2005]、i ~ vi ページ)。

する「エンパワーメント・アプローチ」や「モチベーション・アプローチ」⁹⁾などもこの領域に浮上してくる。さらには、“心の貧しさ”を重視する「人間性アプローチ」¹⁰⁾と呼べるような哲学的、倫理的、宗教的アプローチもこの領域に含まれる。

このように貧困研究の広がりについて“欠乏”という観点から鳥瞰してみると、発展途上国の飢餓線上にあるスラムや農村、あるいは、先進国の都市部のホームレスや失業者だけを見ようとする眼に問題があることがわかる。この欠乏マトリックス上では、“見えるパン”に餓えているスラムの住人だけではなく、“見えないパン”に飢え渴いているスラム支援者、さらには彼らを直接的もしくは間接的に支えている人々やその反対に全く無関心な人々も「貧困者」の対象になりうる。

4. 貧困もしくは“貧しさ”現象を捉える Needs — Capability マトリックス：「貧困者」とは誰か？

“欠乏”という観点から貧困研究を鳥瞰してみて気づくことは、第1に、“欠乏”の対象が物質面だけに限定されずに、精神的な欠乏も含み、そこからの脱却を模索するという意味においてトータルな人間としての富の追求にある点である。第2は、人間的“欠乏”という現象の背後には、複雑な要因が絡み合っているがゆえに、経済的要因に限定しても問題の本質がみえてこない危険性がある。それゆえ非経済的要因も加味して多角的に捉える必要性が生まれ、実に多様なアプローチが乱立する状況になっている。

このような人間本来の深遠なる富の追求とか貧困をめぐる様々の立場からの主張が乱立する状況の中で、どのようなモノサシ（基準）があれば、“欠乏”実態を共通の枠組みで把握し、専門分野を超えて対話が可能となるのであろうか？

そのヒントは、貧困問題に対する人間開発的アプローチの源泉ともなったアマルティア・センの発案による Capability という概念に見出せるのではなかろうか。日本語では「潜在能力」と訳され、彼は“達成可能な諸機能の代替的組み合わせ”、あるいは“さまざまなライフスタイルを実現する本質的自由 (substantive freedom)”と定義¹²⁾している。つまり、潜在能力＝本質的自由と考えている。従って、貧困とは、“たんに所得の低さというよりも、基本的な潜在能力が奪われた状態”¹³⁾という見方をしている。

9) 「ソーシャル・キャピタル・アプローチ」について体系的かつ包括的に紹介している宮川公男・大守隆編著 [2004]、また「エスニック・アプローチ」としては、フィリピンのエスニック・グループ（「バジャウ」）の貧困実態を分析した労作である青山和佳 [2006] を参照されたい。

10) 経営学分野では労働意欲に関する数多くの文献があるが、その代表的なものとして、DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部編訳 [2005] を参考のこと。

11) “心の貧しさ”について、田村一郎編著 [2003] は哲学・思想の視点、社会心理学、ジェンダー論、社会学の視点から多角的に分析しているので参照されたい。

12) Sen. A. [1999]、75 ページ。G. A. コーエンは、アマルティア・センの潜在能力概念とは、選択の自由とほぼ同義であると考えている（マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン、竹友安彦監修・水谷めぐみ訳 [2006]、45 ページ）。

13) アマルティア・セン、石塚雅彦訳 [2000]、99 ページ。

しかし、この「潜在能力」(Capability) 概念は不幸にもかなり難解である。むしろ、彼が引用した栄養不良の例えから考えるとわかりやすい¹⁴⁾。彼は栄養不良という(物的) 欠乏状況は同じであっても、飢えている人と断食する人とは(その欠乏の原因となる) **Capability** が異なると考える。断食する人の方が **Capability** は高い。なぜなら、**選択できる自由がある**からだと彼は説明する。したがって、**選択できる自由があるか否か**は“欠乏”現象の原因を知る大切なモノサシとなる。

しかし、それでもセンの **Capability** 基準は“欠乏”現象のひとつの原因を示すだけであり、不十分である。なぜならば、**選択できる自由が仮に全く同じでも、Capability** とは異なる原因で栄養不良になりうるからである。例えば、「ダイエットする人」や「偏食している人」(**偏食タイプ**) も、断食している人と同じように、栄養不良となりうるからである。センの **Capability** 基準ではその差異は説明できない。そのため、この差異を説明することができる別のモノサシが必要となる。

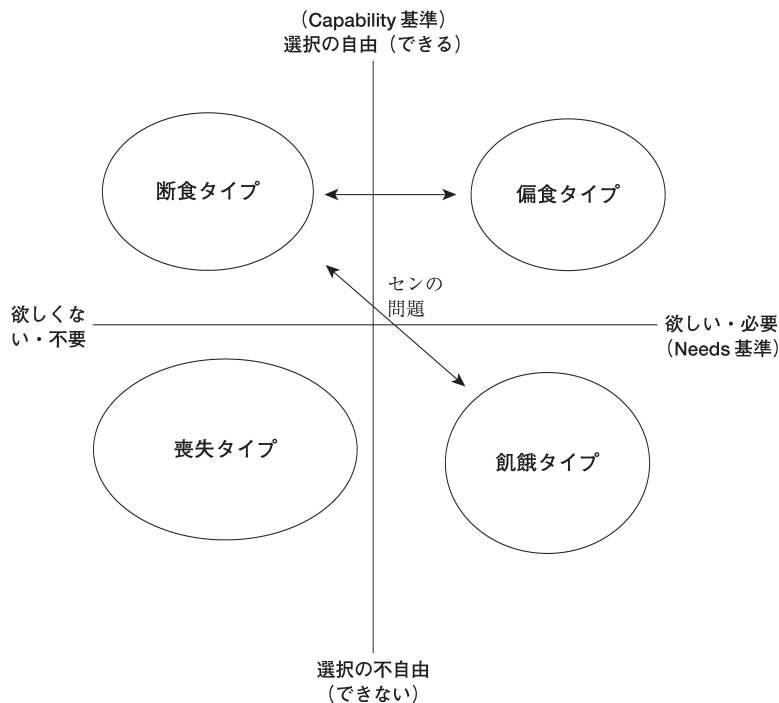
そこで、我々は、そのモノサシとして潜在的ニーズである欲求をも含む広い意味での必要性基準を提示する。これを、狭義の必要性基準と区別するために、**Needs** 基準と呼ぶことにしたい。この基準によれば、**断食タイプ**と**偏食タイプ**の違いが説明できる。つまり、両者とも“食べない”という選択の自由はあるが、前者は、“食べたくない”というマイナスの **Needs** があるのに対して、後者は、“食べたい”というプラスの **Needs** がある。その結果、両者ともに、栄養不良という欠乏現象を招いている。

したがって、この2つのモノサシによって、“欠乏”現象の主体である**貧困者**の全体像を把握し、その背後にある原因探索が可能となる。図表4をご覧ください。ここには、**Needs—Capability** マトリックスによる“欠乏”主体の4つのタイプ領域が「食」を事例として示されているが、栄養不良という欠乏現象の主体としての**貧困者**には4つのタイプがあることに気づく。センが引用した「飢えている人」(**飢餓タイプ**) と「断食する人」(**断食タイプ**) との間には確かに **Capability** において違い(問題)があることがわかる。しかし、**Capability** (選択の自由があるか否か) だけではなく、**Needs** (欲求・必要性の方向) も全く異なる位置にあることが明らかとなり、両者を比較すること自体に難点があると感じざるを得ない。また、この2つの欠乏(貧困者)タイプや前述した**偏食タイプ**の他にも、“食べたくないし、食べるという選択もできない”という状況下にある**貧困者**、例えば、精神的喪失に直面しているタイプ(**喪失タイプ**) も含まれる。

このような欠乏をめぐるマトリックス(複眼)的意識空間を観察することによって、“欠乏”の主体である**貧困者**とは、特定化された一部の人間ではなく、各々の欠乏タイプを包括する、我々すべての人間—私もあなたも—が問題であることに気づく。したがって、この気づきは、我々に重要な問いかけを提起する。つま

14) Sen. A. [1999]、76 ページ。なお、センは「飢饉と栄養失調」に関してインドと中国とを比較しているが、その比較の視点を「福祉と基礎的な自由」に置いているとして、彼の議論を要約している絵所秀紀氏の論文「開発経済学のパラダイム転換と貧困問題」、絵所秀紀・山崎幸治編 [1998]、59～62 ページを参考にされたい。

図表4 Needs—Capability マトリックスからみた4つのタイプの“欠乏”主体（貧困者）



出所：大場+大場ゼミナール共著 [2007]『学問力のすすめ』（麗澤大学出版会）や貧困研究に関する文献等を参考にして筆者が作成したもの。

り、この欠乏マトリックス上で生きている我々にとって、“欠乏”つまり貧困からの脱却は可能なのだろうか、そして、**真の豊かさ**に辿り着くことは可能なのだろうか、という問い、つまり、真に豊かな生き方（ライフスタイル）を持つことは可能なのか、という重要な問題に直面する。

5. 貧困と真の豊かさを繋ぐ回廊としての「自由の選択」

この問題に対して、我々は（個人の）「選択の自由」から「自由の選択」に発想を180度転換することによって、可能であるという立場に立ち、検討してみたい。

そこで、まず初めに、前述した人間開発論の出発点となったアマルティア・センの潜在能力（capability）アプローチが目指したものを批判的に確認するところから検討を開始する。その検討を通じて、選択の自由がいくら拡大したとしても、真の豊かさに結びつかない可能性が高いことを指摘する。そして、その論理的帰結として、どの自由を選択するかが問われることになるが、真の豊かさに結びつく自由とは、“与えられた自由（given freedom）”であることを論ずる。

1) 選択の自由は不自由の始まり？

アマルティア・センは、開発とは、“人々が享受する（楽しむ）真の自由（real freedoms）を拡大させるプロセス”であり“不自由の主な原因を取り除くことである”¹⁵⁾と考えており、そのためには潜在能力を高めることが大切であることを力説している。しかし、彼が強調している“真の自由”の概念自体が曖昧であるばかりではなく、より根源的な問題として、個人の自由が拡大することを善と考え、そのコストを等閑視している点である。すなわち、個人の選択の自由が拡大することとは、個人の欲望の実現可能性が拡大すると同時に、個人の保有する資源（時間や経済的富など）を活用することに対する身体的、精神的コストもしくはリスクが増大することを意味するからである。別言すれば、個人が自由になりたいという欲求があっても、あるいは仮に自由になれる潜在能力があったとしても、このようなコストやリスクが存在している限り、決して自由にはなれないという現実を無視すべきではないという点である。すなわち、選択の自由の拡大は潜在能力が向上した結果であると考えてみても、欠乏状態からの脱却を意味するものではなく、むしろさらなる欠乏を招く可能性が高く、それは、不自由の拡大を意味するものと言える。現実世界では、経済成長により物質的富が増加し、経済的欠乏から脱却した日本などの先進諸国において、選択の自由は飛躍的に拡大している。しかし、その自由は個人の欲望を解き放つがゆえに危険な自由と言えるものであり、その対価として、精神的飢餓としての不安や孤独、空虚さ、依存症など（の不自由）に苦しんでいる人がどれほど多いことか！ つまり、このような危険な自由の蔓延は、さらなる欠乏を同時に発生させ、貧困が自由世界の中でさらに増殖されていることを意味する。もしこの事実を受入れるならば、自由を拡大させる潜在能力を開発していくら向上させたとしても、ほんとうの意味で自由を実感できず、真の豊かさに繋がる保障はどこにもないといえる。

2) 選択の自由から自由の選択へ

したがって、選択の自由が拡大している現代の経済社会において、大切なことは、我々一人一人が直面している自由そのものを吟味することであり、問い直すことである。一般的に、選択肢が増え、選ぶ自由が拡大すると、少なくとも4種類の悩みに直面する。第1は、“嬉しい悩み”であり、たくさんの選択肢の中から、何を選ぶべきか、その判断基準、優先順位付け（選択能力）が問われるが、自由であるがゆえに、なかなか決断できない悩みがある。第2は、“悲しい？悩み”であり、ある選択肢を選ぶことはそれ以外の何かを犠牲（コスト）にしなければならないという問題が発生する。第3は、“気づかない悩み”であり、意識にはない、もっと別な選択肢があるかもしれないという漠然とした不安に覆われることである。第4は、“自由があっても、自由を実感できない悩み”であり、不自由そのものと言える。例えば、さまざまな人間関係のしがらみに縛られるとか、あるいは、電子メールという選択肢を選んだ（選ばされた？）自由と引き換えに、その送受信、ジ

15) 同上 [1999]、3ページ。

リンクメールの削除に追われてしまうということは情報化社会で生きる誰しもが日々経験していることである。

このような悩みがあること自体、自由に対して無防備であってはならない警告であり、選択の自由そのものの増大に対して、自分の自由意志でどの自由を選ぶべきか、というより根本的な問題を提起しているのではなかろうか？ 自由に対する警告の書としては、日本を代表する哲学者、思想家である長谷川三千子・佐伯啓思・竹田青嗣・小浜逸郎 [2007] が同書において興味深い指摘をしている。自由と幸福に関する対談を1冊の本にまとめたものであるが、その総括の中で、小浜は、「……“自己価値の自由な追求”が、実存としての人間を必ずしも幸福にしない……」と結論づけている¹⁶⁾。その理由として、①例えば職業選択や結婚相手の選択などにおいて、自己決定を先延ばしにすることによって不安心理が形成されること、また、②「自由に自分の個性を磨いてよい」と言われたことに対する一種の強迫観念が生まれること、さらには③「選ぶ自由」の増加とともに「選ばれない自由」も増加し、機会喪失感があることを指摘している¹⁷⁾。

ところで、そもそも自由とは、一体何か？ アマルティア・センの潜在能力アプローチでは自由が目的であり、善なるものとして前提としているので、その前提を問う必要がある。しかし、この問いかけをすることは、自由をめぐるこれまでの膨大な研究の扉を開くことであり、それはまさに百家争鳴の観を呈し、その中で迷宮入りする危険性が多分にある。そこで、ここでは我々が日々直面する自由というものを吟味しどのような自由を選択すべきか、という指針づくりが可能となるように、自由を定義し、自由のパターン化を試みる。

自由とは、広辞苑などの辞書では、個人的、社会的、倫理的な自由として理解されているが¹⁸⁾、共通する点は「束縛がないこと」もしくは「自在性」である。また、このキーワードについて、社会思想家の佐伯啓思氏の見方によっても確認できる。つまり、佐伯氏によれば、現代社会の自由とは、個人の主体性、主観性、多様性（相対性）といった観念で特徴づけられる「個人の選択の自由」を意味し、何ものにも拘束されず、強制されず意思決定をすること、つまりある決定を選択すること、と指摘している¹⁹⁾。

そこで、自由（不自由）とは、このような非束縛性（自在性）、主体性、主観性、多様性に特徴づけられていることを考慮し、「価値主体としての“わたし”が感ずる時間的・空間的自在性」と定義してみたい。この定義に従えば、“わたし”だけでは、孤独（不自由）を感ずるかもしれないが、価値対象である「あなた（他者）」がいれば、孤独感がなくなり生きている自由を感ずることができることを示唆して

16) 長谷川三千子・佐伯啓思・竹田青嗣・小浜逸郎著 [2007]、155 ページ。

17) 同上、151～154 ページ。

18) 個人的自由としては、「束縛のないこと」、「規則・負担・義務などからの解放、免除」、あるいは「心のままであること」、「思う通り」、「自在」とある。また、社会的自由としては、個人の権利（人権）が侵されないことであり、市民的自由や政治的自由をさしている。さらには、倫理的自由として、ドイツの哲学者カントによれば、意志が感性的欲望に束縛されず、理性的な道徳命令に服すること（自律と同義）であり、またフランスの哲学者サルトルによれば、人間は存在構造上自由であり、従って常に未来の選択へと強いられており、それ故自由は重荷となる。

19) 佐伯啓思 [2004]、276～277 ページ。

いる。もっとも、「あなた」がいても息苦しい（不自由）場合もあるが、これは、時間的、空間的な自在性が損なわれているために発生すると考えられるので、ある程度の自在性（俗に言う“居場所”）を確保できれば、自由を感じる可能性は高まると推測できる。

したがって、この定義に則れば、自由（不自由）とは、感性的な作用であり、それを量的に把握することが可能となるばかりではなく、その質的な違いもあることが明らかとなる。まず始めに、感性的な自由の量を把握するとは、価値主体である「わたし」が自由をどの程度実感しているのか、という問いに対する答えを発見することである。自由を実感する程度とは、価値主体である「わたし」が感ずる自由（時間的、空間的自在性としての自由）は、価値の対象である「あなた」との間で発生する自由の純流出入量（ネットフロー）によって決定される。

次に自由の質的な違いについてであるが、なぜ質的な違いが発生するのだろうか？ 理由は2つある。第1に、価値主体である「わたし」には、自分の保有する自由な時間や空間を「あなた」に与える（GIVE）か、その反対に「あなた」から奪う（TAKE）ことも可能であるからである。第2に、価値主体である「わたし」は、「あなた」から自由を与えられる（GIVEN）か、あるいはその反対に「あなた」から「わたし」の自由を奪われる（TAKEN）可能性もあるからである。

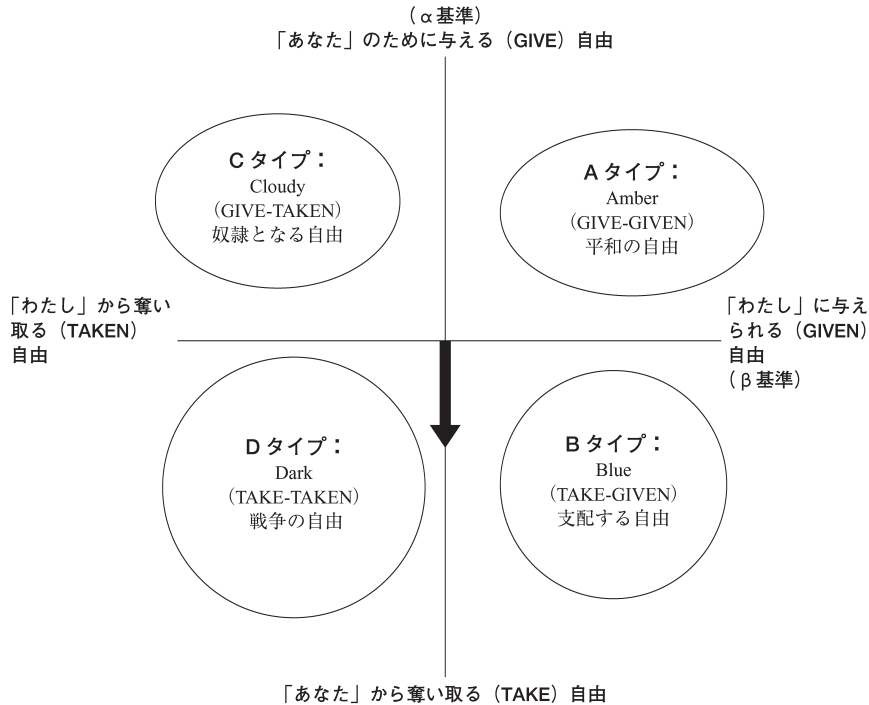
したがって、「わたし」が感ずるネットフローとして自由量と自由の質の違いは、2つの基準によって決まる。ひとつは、「わたし」によって流出入する自由量（ α 基準）であり、もうひとつは、「あなた」によって流出入する自由量（ β 基準）である。図表5に示されているように、この2つの基準によって、「わたし」が感ずる自由には、自由の量的な違い（○の大きさによって示されている）だけではなく、質的違いとしての4つのタイプ（色？）が存在していることがわかる。

Aタイプ（Amber：黄色）は、GIVE-GIVENタイプであり、「わたし」は自らの自由を与える（GIVE）とともに、「あなた」から自由が与えられている（GIVEN）と感じており、「わたし」が自由を実感する量は、増減する場合、もしくは不変である場合もありうるが、いずれの場合でも、両者の間で自由を与え合っているため、自由をめぐる争いはなく、「平和の自由」が実現されている。

その対極にあるのが、Dタイプ（Dark：黒色）である。このタイプは、TAKE-TAKENタイプであり、「わたし」は「あなた」から自由を奪う（TAKE）と同時に、「あなた」からも自由を奪われている（TAKEN）と感じており、両者の間で自由をめぐる熾烈？な争いが展開されているタイプ（「戦争の自由」）である。

Bタイプ（Blue：青色）は、TAKE-GIVENタイプであり、「わたし」は「あなた」から自由を奪う（TAKE）と同時に、「あなた」から自由が与えられている（GIVEN）と感じており、「わたし」が自由を実感する量は、確実に増加し、「支配する自由」が実現されている。他方、Bタイプの対極にあるのがCタイプ（Cloudy：灰色）である。このタイプは、GIVE-TAKENタイプであり、「わたし」は自らの自由を与える（GIVE）だけでなく、「あなた」からも自由を奪われている（TAKEN）と感じており、「わたし」が自由を実感する量は、確実に減

図表5 4つの自由のタイプ



出所：ライフスタイル研究会等での議論をもとに筆者が作成したもの。

少し、「奴隷となる自由」に直面している。

我々は、このようなマトリックスで浮き彫りとされた「自由」世界において、どの自由を選択しているのだろうか？ここに登場する「わたし」がとる行動とは、図表5に示されているように、通常、大切と感じている自らの自由（時間、カネなど）をGIVEすることよりも、むしろTAKEする方向（下方向）に動くのではなかろうか。なぜなら、GIVE行為は、自らの自由を手放す（犠牲）ことになるのでその選択・決断を回避し、「わたし」が価値ある対象と感じている「あなた」（の自由）を獲得するための選択をするからである。このことは、前述のアマルティア・センの潜在能力アプローチ、もしくは人間発展アプローチが意図しているところの自由の獲得行動（選択肢の拡大過程）であり、また小浜が指摘するところの“自己価値の自由な追求”のベクトルに他ならない。価値対象としての「あなた」とは、「わたし」が大切と考えるすべてであり、家族や恋人、友人といった人間だけではなく、おカネや仕事、趣味、グッズ、名声、権力、いのち、ペット、自然、神・仏なども含まれる²⁰⁾。

しかし、この方向にある自由とは、支配と戦争が渦巻く自由世界であり、その先

20) このようなマトリックスで浮き彫りとされた「自由」世界は日常的に起きていることなので、自由をめぐる様々な「あなた」との攻防？について、具体的に状況を想定して、自らの自由に対する実感度と自由のタイプを確認することを是非お奨めする。例えば価値対象としての「あなた」が人間、つまり自分にとって大切な人を想定してみよう。その場合、家庭の現場であれば夫婦関係や親子関係、また、教育

には悲劇や落とし穴がある場合が多い。つまり、支配する自由（Bタイプ）に向かう場合には、「わたし」は支配欲の虜となり、高ぶり、他者の痛みがわからなくなるし、また、戦争の自由（Dタイプ）に向かう場合には、闘争心がむき出しとなり、自由をめぐる終わりのない奪い合い競争の中で疲れ果ててしまう。

そこで、自由の方向を逆転させて、価値対象の TAKE する自由ではなく、価値主体の資源を GIVE する自由の方向（上方向）に眼を転じてみよう。この方向にある自由世界には、奴隷と平和の自由がある。しかし、この方向においても、危険がないわけではない。まず、奴隷となる自由（Cタイプ）に向かう場合には、「わたし」は自由が剥奪され、不自由となり動けなくなる（「わたし」が残業に明け暮れる会社人間の夫であり、家庭で育児に追われる主婦などである場合）可能性がある。また、平和の自由（Aタイプ）に向かう場合でも、一見平和に見えても、うわべだけの与え合う（与えられる）自由であり、自由の中にあっても空虚さや孤独感に支配される（不自由を感じる）恐れがある。

このような点をふまえると、我々は、結局どのような自由の道を選んだとしても、様々なリスクやコストが潜んでおり、本当の意味で自由を実感することができず、欠乏からの脱却は無理で、真の豊かさには到達できないことを意味しているのだろうか？ 否、決してそうではない。我々の選択肢には、じつは脱出の道が用意されていることを次に見てみたい。そのためには、貧困に対する固定観念を問い直し、貧困からの脱却ではなく、貧困に対する覚醒、つまり人間の存在理由としての貧困、もしくは欠乏に気づくことによって「真の自由」、すなわち「真の豊かさ」に繋がる道があることを探る必要がある。

3) 貧困脱却から貧困覚醒への発想の転換と“貧しき”存在としての人間

前に述べた「本当の意味での自由を実感できるか否か」という問いにある“本当の意味での自由”とは、真の自由をさすが、それは一体何を意味するのだろうか？ “真の自由”の対極にあるのが“偽りの自由”であるとするならば、その真偽の判別基準とは何か？ 我々はその基準を自由＝自在性が永遠的かつ絶対的であるか否かに置くこととする。つまり、“真の自由”とは、永遠的で絶対的な価値を有する自由である。価値主体である「わたし」という人間に、そのような自由（時間的、空間的自在性）はあるのだろうか？ この問いに対する答えは否である。なぜなら、人間とは生と死に直面する生き物であるゆえに不自由な存在であり、絶対的でも不滅でもない存在だからである。不自由な存在であるがゆえに、人間は、自由を求めようとする。それは、人間とは本来的に貧しき存在であることの証明であり、それ故に豊かさを求めようとする。しかし、いくら自分自身で努力しても、あるいは仮に絶大なる社会的支援があったとしても、自由を求める者が、自由を実感できず、また豊かさを求める者が豊かさを実感できないとすれば、その自由や豊かさとは偽りと呼べるものであろう。その反対に、真の自由や豊かさとは、不自由のなか

現場であれば、教師と生徒・学生との関係、さらに、職場の現場では、上司と部下の関係における自由を自分がどれだけ実感しているのか、吟味することは一考するに値する。

であっても自由を実感することができ、また貧しき状況のなかであっても豊かさを実感できることではなかろうか。例えば、現代は多忙社会であり様々な局面でストレスが発生しやすい状況にあるが、そのような“時間欠乏”にある状況下でも、真の自由、真の豊かさがあれば、欠乏感がなく満たされた時間を送ることができることを意味している。このことは、人間とは、欠乏しているものに飢え乾く生き物であるという見方を前提としている。そのような生き物ゆえ、欠乏するが、欠乏感はなく、豊かさを実感できる可能性がある。これこそが真の豊かさといえるのではなかろうか。

したがって、貧困問題に対する認識そのものを問い直し、人間とは貧困なる存在であることに気づくこと、つまり“貧困覚醒”することが、真の自由・真の豊かさに繋がる第1歩といえよう。

では、貧困なる（貧しき）存在であることに気づくことがなぜ大切なのか、そして何故、人間とは貧困なる存在なのだろうか？ これらの問いに対する答えのヒントは聖書に見出される。まず、最初の問いについて、聖書によれば、「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」（新改訳、ヨハネの黙示録第3章第17節）と警告していることから、貧しき存在であることに気づく大切さが了解できる。

また、次の問い（なぜ貧困なる存在なのか）については、人間とは、真に富む（豊かな）存在から乖離した状態にあるとされる。今から2,750年ほど前に預言者イザヤによって書かれたイザヤ書には次のように記述されている。「私たち（人間）はみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。」（新改訳、イザヤ書第53章第6節）。また、“見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがた（人間）の咎が、あなたがたのと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。”（同第59章第1、2節）。“自分かってな道に向かって行った”ことや“神との仕切り”とは、絶対的存在である創造主から乖離状態にあることをさし、これを、“罪”もしくは“背きの罪”と呼んでいる。実は、この罪こそが、人間が貧困なる存在であることの根本的な原因であり、この罪の問題が解決されない限り、貧困は解決されないことを意味する。この罪とは、民族、宗教、習慣・文化を超えて人類に共通するものであり、日本人も当然のことながら例外ではない。残念なことに、この罪は人間のいかなる叡智・知性をもってしても解決不可能である。なぜなら、それは、人間の存在理由を表わすDNAのような性質があるからである。しかし、嬉しいことに、貧しき存在である人間にも真の自由、真の豊かさに繋がる選択肢が用意されている。それは、真に豊かな存在である天地万物を創造した神から私たち一人一人に罪から解放される自由が与えられていること（given freedom）である。ヨハネによる福音書には、「真理はあなたを自由にする」（第8章第32節）とある。神は愛であり、真理そのものであり、その真理が私たちすべての人間に罪からの自由を与えてくれる。つまり、罪から自由となる選択肢

を用意していることに気づかされる。これこそが真理から与えられている自由であり、その自由を選び、受け取ることによって、貧困者であっても値なしに真の豊かさ（愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制——ガラテヤ人への手紙第5章第22、23節——）を体験することができる。これはキリスト教という宗教を選ぶ選択ではなく、ただ聖書の言葉をそのまま受入れる選択を意味している。まさに、この真実こそが「心の貧しき者は幸い（祝福されるという意味）」（マタイの福音書第5章第3節）であることの根拠となっている。

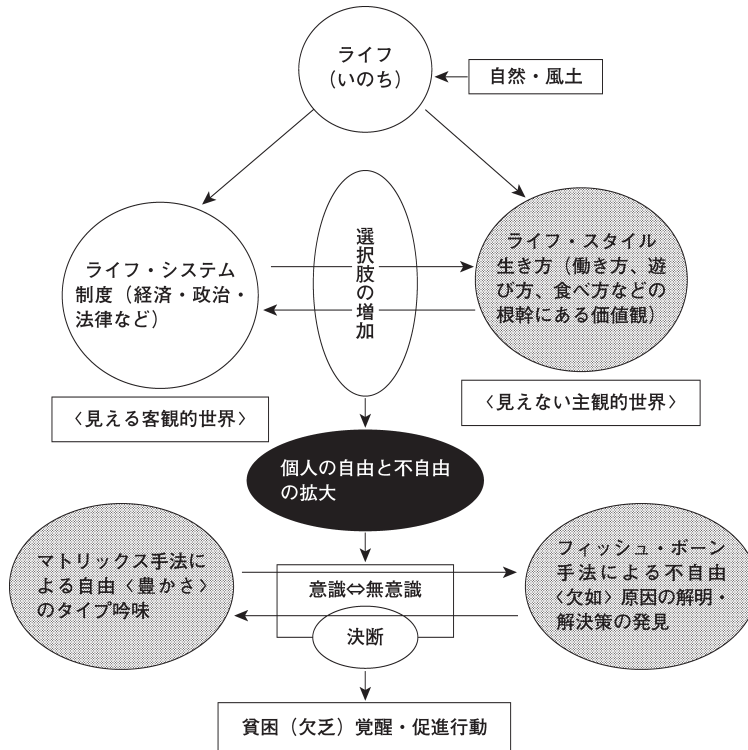
4) 「真の豊かさ」に繋がる戦略としての“貧困覚醒”と「自由の選択」

すべての人間が貧しき存在であり、欠乏していること、不自由であることに気づくことを、我々は“貧困覚醒”と呼んでいるが、この気づきには、「真の豊かさ」に繋がる戦略的意味合いがある。つまり、貧困覚醒戦略とは、政策的には、貧困（＝欠乏）現象削減政策ではなく、貧困（＝欠乏）意識化促進政策であり、政策対象レベルが異なるだけではなく、政策のベクトルも正反対となる。ここで誤解してほしくないこととは、“貧困覚醒”とは、決して貧困問題を容認し、あきらめムードが漂う無関心派や虚無主義になることではないことである。むしろ、その反対であり、貧困覚醒戦略とは、自分自身も含むあらゆる欠乏者に関心を持ち、積極果敢に喜んで彼らを救出することがその意図するところである。聖書には、「(身体的あるいは精神的に) 捕らえられて殺されようとする者を救い出し、虐殺されようとする貧困者を助け出せ。」（箴言第24章第11節）と明確に示されている。欠乏者とは、地理的にもしくは経済発展段階的に遠い人（スラムの住人など）というよりも、自分という「わたし」かもしれないし、すぐ近くにいる隣人かもしれない。欠乏者とは、究極的には生きていても“いのち”に欠乏している人々である。つまり、身体的（経済的・物質的）あるいは精神的な欠乏状態にあるために、生きる元気のない人々であり、意識的あるいは無意識的に死のうとしてしている人々、あるいは「殺されようとしている」人々である。貧困覚醒戦略の狙いとは、そのような欠乏者に、生きる自由＝“いのち”の存在に気づき、生に対する渴望が生じる機会を提供することである。

では、このような貧困覚醒戦略はどのようにすれば実践可能となるのだろうか？それは、個人が意識的もしくは無意識的に選択し享受している自由を吟味することによって実践可能であることが、図表6に示されている。

すなわち、人間の個人としての選択の自由（選択肢）の増加は、人間のライフ（いのち）の意識的総体であるライフ・スタイルとその行動の総体であるライフ・システムの相互作用によって実現されていると考えられる。個人の選択肢の増加は、個人の自由の拡大、潜在能力の向上を意味し、貧困から脱却し豊かさを手にすることである。しかし、同時に自由の拡大は、欲望の虜となるだけではなく、理性と感性という自分の意識空間に“ひきこもり”他者とのつながりが遮断されるという意味での（社会的）不自由も拡大することとなる。不自由な人間とは時間的、空間的自在性が制約されており欠乏状態に置かれた人間であり、たとえ物質的・身体

図表6 自由の選択と貧困（欠乏）覚醒・促進行動のためのフローチャート



出所：ライフスタイル研究会等での議論をもとに筆者が作成したもの。

的に豊かであっても精神的に豊かではないので、その結果、自由を実感できなくなる。

そこで、共有化手法である価値意識マトリクスによって、「わたし」が享受している自由のタイプ（前述）を他者との協働によって吟味（問題発見）することが必要となる。同時に、原因探索の手法であるフィッシュ・ボーンによって、欲望の虜となっている「わたし」、あるいは自己の理性と感性にひきこまる「わたし」に気づき、その原因を考え、そこから脱却するヒントを得ることである。すなわち、このような手法を活用して、価値あるものを TAKE する自由のために、自分の価値ある資源を投入（GIVE）する行為を吟味することであり、自分の保有資源である“いのち時間”に見合う価値、すなわち、ヴァリュー・フォー・ライフタイム（value for lifetime）があるかどうかを評価することである。自由な世界では、無意識的あるいは意識的にさまざまな依存症や中毒になりやすいので、自らの“いのち時間”の欠乏性に気づき、それを投入している価値対象を吟味し手放す意志を持つことは大切と考えられる。

ヴァリュー・フォー・ライフタイム（value for lifetime）を評価するために、具体的には、以下の2点、①欠乏対象としての自由と②“いのち時間”の欠乏性に

ついて、気づくところから実践してみたいかがだろうか。

まず第1に、マトリックス上に複数の価値主体である「わたし」が登場するが、その各々の「わたし」にとって価値があると思っている自由、あるいは欠乏の対象を特定化し、客観的かつ具体的に捉えてみることである。例えば、金銭的自由（金銭的欠乏）、労働からの自由、自己実現の自由、不安・孤独からの自由（安心欠乏）、成長するための自由、愛する（愛される）自由、罪からの自由、責任ある自由、遊ぶ自由、生きる自由などの自由リストをもとに優先順位をつける。そして、優先度が高い自由を価値意識マトリックスにつけることによって、他者の「わたし」との意識の違いが「見える」ようになり、主観的自由を客観化し評価できるようになる。例えば、“不安・孤独からの自由”が選択された場合を考えてみよう。その自由が、具体的に、バーチャルな情報共有空間である「ミクシィ」などのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）という手段によって実現されているとした場合、その自由の価値とコスト、リスクについて他者と議論することによって吟味・評価することである。その評価プロセスにおいて、代替的な手段としてのリアルな空間での情報共有の価値についても共有することが可能となる。

第2に、「わたし」が保有する資源とは、時間、カネ、性格・品性、能力、資格、知識、経験などであり、ストックとしての資源量は増加（潜在能力の向上）するものの、それと反比例して「わたし」に与えられた“いのち時間”は確実に減少する。“いのち時間”の絶対的減少は、“いのち”に対する欠乏感（欠乏意識）を生じさせる。つまり、欠乏感が高ければ高いほど、“いのち”に対する価値は高まり、与えられた“いのち時間”をどの自由（価値対象）に投入すべきか、当然慎重になる。しかし、このことに対する覚醒がなければ、たとえ明日までのいのちであっても気づかない危険性がある。例えば、自分が末期ガンで余命わずかであることを知ることは絶望の淵に立たされるが、暇をもてあまし虚しく過ごす“いのち時間”よりは欠乏感が高いという意味においてははるかに価値がある。したがって、価値主体が保有する“いのち時間”に対する欠乏感を客観的に評価し、覚醒する機会をもつことが大切となる。つまり、“いのち時間”を「わたし」が保有するどの資源に投入しているのか、そしてそれが効果的といえるのか、議論を通じて吟味することである。例えば、貧困が大学教育の現場にあると考えてみよう。貧困なる大学生の場合、大学4年間の“いのち時間”を、自らの能力開発のために投入すべきか、あるいは、カネと経験修得のためにバイトに投入すべきか、議論することによって、貧困（欠乏）覚醒することは意義あることではなかろうか？

こうしたマトリックスを活用した意識的な行動を通じて、自由の危険さに気づき、ヴァリュー・フォー・ライフタイム（value for lifetime）の視点から、“いのち時間”の欠乏性を意識しながら自由の価値対象を変化させることが可能となる。このような意識的行動によって、前述の聖書で示された真理なる「あなた」に出会う可能性が生まれるだけでなく、「わたし」の持っている“いのち時間”を真理なる「あなた」にGIVEしようと決心するその瞬間に、「わたし」に真の自由があたえられ（given freedom）、真の豊かさが降り注がれる体験をすることが可能とな

るのではなからうか。まさに、貧困問題を考えることとは、意識的・無意識的に選択された自由・不自由を吟味することであり、真の自由、真の豊かさに繋がる道が用意されていることを知ることでなからうか。

参考文献

- 二村泰弘編 [2005] 『「貧困概念」基礎研究』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
 アマルティア・セン、石塚雅彦訳 [2000] 『自由と経済開発』日本経済新聞社。(Sen, A. [1999] *Development as Freedom*. Oxford: Oxford University Press.)
 アマルティア・セン、大石りら訳 [2002] 『貧困の克服—アジア発展の鍵は何か』集英社。(Sen, A. [1999] *Beyond The Crisis-Development Strategies in Asia*. Institute of Southeast Asian Studies.)
 マーサ・ヌスバウム、アマルティア・セン、竹友安彦監修・水谷めぐみ訳 [2006] 『クオリティ・オブ・ライフ—豊かさの本質とは』里文出版。
 絵所秀紀・山崎幸治編 [1998] 『開発と貧困—貧困の経済分析に向けて』アジア経済研究所。
 佐藤元彦 [2002] 『脱貧困のための国際開発論』築地書館。
 J. シーブルック、渡辺景子訳 [2005] 『世界の貧困—1日1ドルで暮らす人びと』青土社。(Seabrook, Jeremy [2003] *The No-nonsense Guide to World Poverty*. Oxford: New Internationalist Publications Ltd.)
 国連開発計画 (UNDP) [2004] 『人間開発報告書 2004』国際協力出版会。
 アジット・S. バラ、フレデリック・ラペール、福原宏幸・中村健吾訳 [2005] 『グローバル化と社会的排除—貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂。
 宮川公男・大守隆編著 [2004] 『ソーシャル・キャピタル—現代経済社会のガバナンスの基礎』東洋経済新報社。
 青山和佳 [2006] 『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会。
 DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部編訳 [2005] 『動機づける力』ダイヤモンド社。
 田村一郎編著 [2003] 『「心の貧しさ」を考える—「人間性」探究の一助として—』(増補・改訂版) 北樹出版。
 長谷川三千子・佐伯啓思・竹田青嗣・小浜逸郎著 [2007] 『自由は人間を幸福にするか』ポット出版。
 齋藤純一 [2005] 『自由』岩波書店。
 仲正昌樹 [2003] 『「不自由」論—「何でも自己決定」の限界』(ちくま新書) 筑摩書房。
 数土直紀 [2005] 『自由という服従』(光文社新書) 筑摩書房。
 佐伯啓思 [2004] 『自由とは何か—「自己責任論」から「理由なき殺人」まで』(講談社現代新書) 講談社。
 ウィリアム・バーンスタイン、徳川家広訳 [2006] 『「豊かさ」の誕生—成長と発展の文明史』日本経済新聞社。(Bernstein, W. J. [2004] *The Birth of Plenty*. The McGraw-Hill Companies, Inc.)
 Inglehart, R. et al. eds. [2004] *Human Beliefs and Values—a cross-cultural sourcebook based on the 1999–2002 values surveys*. Siglo XXI Editores (Mexico).
 Dasgupta, Partha [1993] *An Inquiry Into Well-Being and Destitution*. New York: Oxford University Press.
 Danziger, S. H.・Haveman, R. H. eds. [2001] *Understanding Poverty*. New York: Russell Sage Foundation.
 Lister, R. [2004] *Poverty*. Cambridge: Polity Press.

*大場裕之(おおば・ひろゆき)

1953年山形県生まれ。早稲田大学(社会科学部)卒業。ジャワハラル・ネルー国立大学院大学博士課程修了。Ph.D.取得(経済学)。現在、麗澤大学経済学部教授、同大学大学院国際経済研究科教授。インド経済社会、ライフスタイル、モチベーション、日本的経営、自動車産業、開発と貧困、技術吸収力、グローバリゼーションなど、経済学の枠を超え、人間の意識や行動に深くかかわる問題を、主たる研究分野としている。著書には、共著、『光の国・イン

ト再発見』(麗澤大学出版会、2005)、『学問力のすすめ—“活きた”学問を楽しむために』(麗澤大学出版会、2007)、*Industrial Development and Technology Absorption in the Indian Steel Industry: Study of TISCO With Reference To YAWATA in Japan* (Allied Publishers Pvt. Limited, 2005) などほか多数ある。